

あとがき

『ピカソ以後』と『美術の散歩道』を合せ、ここに『知命記—ある美術愛好家の記録—』を出版することとなった。

第一部『ピカソ以後』は筆者が二〇年間在職した農林中央金庫の社内誌『共助会報』に昭和四五年四月から翌年六月まで十一回連載したものを集録したものである。今回は都合により図版の一部変更をみざるを得なかったところはあるが、文章の内容は昭和四八年六月出版の私家版と同一である。またこの小冊子が出版されるに至った経緯はその〈あとがき〉にくわしいのでご参照いただきたい。

第二部『美術の散歩道』は筆書が南画廊に在職(四八年六月—五二年九月)しているとき、〈無執砂丹(ムシューサタン)〉のペンネームでフジテレビギャラリーの機関紙『gallery』誌上に昭和五一年二月から翌年十月まで十三回にわたり連載した小文に、新たに『ドイツ美術紀行』をつけ加え、とりまとめたものである。

当初、第二部のみで出版しようかと思ったが、両者合せて一冊にした方がいいという周囲の意見が多いし、また、『ピカソ以後』の残部も殆んどなくなってきている。それに小生自身、これから新しく自分の画廊を経営してゆくことを考えると、出版されたものが好むと好まざるとにかかわらず、小生を説明してくれることになる。それならば、この際合本にした方がいいと考え決めた次第である。第一部はどちらかといえば作家に即して記してあり、第二部は幾分時事評論的、履歴書的な傾向があり散歩道よろしくあちこち脇道にも入り道草もある。しかしいずれにせよ、この本はひとりの美術の好きな男が時に触れものした小文の集積であることには間違いない。

この本が出来るまで終始フジテレビギャラリーの白石正美氏のお世話になった。ここに感謝の意を表する次第である。

ところで、この本に『知命記』と題する所以のものは何かといえば、筆者はこの三月で丁度五〇歳を数えるということ、それと機を一にして〈佐谷画廊・SATANI GALLERY〉を京橋の一隅に開設することになるということ、その記念出版であるぐらいのところである。五〇にして天命を知る、というほど大ゲサなものではない。それほど自信があるわけではない。がしかし、コインシデンス coincidence を感じないと言っては嘘になろう。『知命記』と題する所以である。それはそれとして、ただいまの小生は多くの人々の好意に支えられ、このむつかしい時期に、ともかくこういう出発ができるということに深い感慨を憶え、同時に大変有難いことに思うのである。

さて、この新しい画廊は、そのオーナーの体質、経歴からして美術愛好家のためのギャラリーとなるであろう。『ピカソ以後』の現代美術を取り扱うというフラッグをかかげて進むであろう。そして一方では、質のいい具象画も扱っておりますという現実的路

線を内蔵しつつ進むであろう。

霧が深くてわが眼球ではあまり先の方まで見えず心許ないが、いずれは晴れてくるであらう。

いよいよ出帆である。眼球の手入れも怠るまい。

昭和五十三年三月十四日

佐谷和彦